

ウィトゲンシュタインの『確実性の問題』（以下『確実性』）は外界の懐疑論を扱った本であると考えられがちである。しかし、丁寧に読むならば、そこでは懐疑論以外の話題も扱われている。その一つは「深い不一致（Deep Disagreement）」である。例えば、世界が自分とともに始まったと信じる王様とムーアの対立に関する議論（92 節）は、根本的な世界観のレベルに根差す対立を考察するものであり、深い不一致を扱っている。この発表では、『確実性』から、深い不一致における「説得」に関する見解を取り出すことを目指す。先行研究においては、深い不一致においては「説得」とは一種のマニピュレーションでしかないとする見解をウィトゲンシュタインに帰すのに対して、この発表ではその概念形成論を参照することで、ウィトゲンシュタインが深い不一致における「説得」を一種の合理的活動として捉えていると論じる。そして、そこから、深い不一致を乗り越えるために我々がどのような態度で対立に臨むべきかという点に関する倫理を考察する。